

読書通信



No. 115

① 終戦(敗戦)の日が巡ってくるたびに戦中・戦後の幼少時体験から二度とあんな時代が繰り返されぬよう祈るばかりだが、民族戦争やテロ、さらに危なっかしい日本の政治や未曾有の天災人災と落ち着かぬことはなほだしい。そんなわけで猛暑の某日、大岡昇平『証言その時々』(講談社学術文庫、1134円)で往時に思いを馳せてみた。『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』で知られる著者がフィリピンで捕虜となった体験を踏まえて戦後40年にわたり新聞、雑誌などに書き連ねた評論、エッセイ集である。

「崇高な」戦争の醜悪極まりない側面、兵士たちの靖国、敗戦を契機にぬくぬくと民主主義者になり替わった人たちと古き良き時代が帰るのを待つ人たち、旧日本軍とベトナム戦での米軍における民族差別、その他、現代にも通じる論点が次々に登場する。通奏低音のように語られるのは権威、権力への不信感であるが、とりわけ丸谷才一との往復書簡は文学者の最高の知性と良心が表出されていてずしりと重い。

② 日米開戦への道となると、真珠湾攻撃までの日々、どのような情報戦が展開されたのか、おおいに興味がわく。山崎啓明『インテリジェンス1941』(NHK出版、1728円)は米英・日独・ソのスパイ、軍人、政治家が虚々実々の諜報活動を練り広げた闇の世界を、新史料を駆

使して活写したドキュメンタリーである。

情報戦の一つであるスパイ活動では互いの軍事基地を探ったり最高機密を入手したりする様が生き生きと描かれるし、諜報活動以上に重要な暗号戦にも紙幅がたっぷり割かれ読み応え十分だ(本書によると日本の暗号技術は欧米並みに高かったという)。数々のエピソードは総じてドラマチックで言葉は悪いが楽しめた。政治がインテリジェンス活動を活かした国、無駄にした国の違いは現代に通じる話でもある。

③ 香山リカ『リベラルじゃダメですか?』(祥伝社新書、842円)の言いたいことは、要するに今では「リベラル」が過激で危険とされ、原発や自衛権などで反対を叫べば叫ぶほど逆効果になるのはなぜか、群れて反対はしないよう

にリベラル派は注意したほうがよさそうだが、ということらしい。リベラルな保守というのが普通の使い方であったはずが、昨今は保守対リベラルという変な図式になっているのが最大の問題ではないか。そこから出発したらよかった。

④ 嫌韓論の書物があふれ返っているのはいかがかと思うが、当欄でかつて紹介した『呆韓論』の著者の続編は引き続き興味深い内容である。

室谷克実『デイス・イズ・コリア』(日本工業新聞社、918円)は今回も「朝鮮日報」「中央日報」など韓国メディアの報道に全面的に依拠して執筆されていて、韓国としても内容にケチをつけることは難しいだろう。「セウォル号沈没」を主題に韓国人と韓国という国の内実を究明していて、改めて驚かされることだらけだった。(純)